

バロック音楽における音楽的修辞学についての一考察

～Heinrich Schützの受難曲を中心に～

教育内容・方法開発専攻

文化表現教育コース

M11178K

岩切友李恵

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。」(ヨハネによる福音書 1 章 1 -2 節)

聖書の中には、「ことば」がいかんして重要であり、大切であることが記されている。

日本のことわざにも、「口は災いの元」不用意な発言は自分自身に災いを招く結果になる。言葉は十分に慎むべきだという戒め。」ということわざがあるくらい、人にとっては言葉一つで様々な感情を引き起こし、相手を傷つけることや、言い負かすことができるのは原語が違っていても世界共通であると考えられる。

複数の人間が生活を共にする為に、意思の伝達手段としての言葉が必要になる。つまり共同生活するという生活形態に生まれた手段と考えられる。個が複数になり、さらに団体を構成し社会を構成する過程で言葉の発達があったと考えられる。

音楽もまた、感情や思いを伝える手段とし作曲や演奏をおこなうが、作曲家の意図するものを汲みとり演奏することが果たしてできているのだろうかとは私は考えた。

16世紀初期からの宗教音楽、世俗音楽には、

歌詞の想念や個々の語を音楽フィギュール音型によって描写しようとする作曲家たちの試みがあった。

その中でも代表的な作曲家としてあげられる、ハインリヒ・シュッツ (Heinrich Schütz 1585 - 1672) の《マタイ受難曲》を中心に小論では取り上げていきたい。

シュッツの《マタイ受難曲》は、キリスト教礼拝の中で育まれてきた「受難曲」の伝統を背景にしている。受難曲の「受難」とは、神の子キリストとされるイエスの十字架上の死を指す言葉であるが、その経緯を語る聖書の記事に音楽を付したものが、「受難曲」である。ドイツ語でこれを **Passion** と呼ぶ。

フィグーレンレーレという言葉は、ドイツの音楽学者、シェーリング・アルノルト (Arnold Schering : 1877 - 1941) をはじめとする学者により作られ用いられたものである。

弁論における文彩とそれに対応する音楽フィギュールとの相互関係を意味する。

小論においては、上記のような、音楽的修辞学の背景を西洋史などから考え、どのように体系づけられていき、どのような人物によって、音楽的修辞学の発展や、その試を、実践していったか、影響を与えたかなどを考察していきたい。

キリスト教徒としての歩みとマタイによる受難

について考察し、このフィグーレンレーレの観点と象徴表現から、宗教作品の中でも有名な、《マタイ受難曲》を考察し、言葉を越えた、シュッツの信仰をどのようにして音楽で表現しているのかを確認しようとする。

また、この手法が近現代では用いられているのかも今後の課題として考察していきたい。

I. 17世紀西洋音楽の概観：ここでは17世紀の西洋史の背景を概観することから、その時代の音楽の特徴及び、どのような人物が活躍していたのかを考察する。その中から、バロック音楽の成り立ちや、様式、形式を考察している。

II. 音楽的修辞学の導入とその背景：ここでは、音楽的修辞学がどのような流れで導入し、受け入れられていたかを考察する。特に、マッテゾンやブルマイスターを用いてフィグーレンレーレ、アフクテンレーレを考察している。

III. 音楽的修辞学の実践例としてのシュッツの「受難曲」：ここではシュッツが作曲した、3つの受難曲のうちの《マタイ受難曲》を中心に考察していく。また、マタイの聖書のことばも照らし合わせながら、音楽的修辞学の例もみていきたい。

IV. 終わりに：ここでは、シュッツを通じて見た音楽修辞学とその意義や、西洋音楽史において修辞学が果たした意味などについて、考察していく。また、近代の影響にも触れていく。

以上「バロックにおける音楽的修辞学についての一考察～Heinrich Schutzの受難曲を中心に～をもとに」特に《マタイ受難曲》を考察してきたが、それは私が思っていた以上に様々な趣向がとられていること、言葉の力をはるかに超越した音楽があることを感じた。楽譜を目ながら、《マタイ

受難曲》を聴くとまた違った聴き方ができることを知った。シュッツの作り出すその音が、音楽だけとして残るのではなく楽譜上で美術の絵画のように2つの芸術を残しているかのように思わされた。それは私の目には、音楽を使って手品をしているかのように思えた。

シュッツの信仰が土台にあり、《マタイ受難曲》がつくられたことがよくわかる。シュッツの神に仕える姿勢が音楽そのものに表現されていることがはっきりとわかった。シュッツの信仰を踏まえたうえで、マタイ受難曲を考察しなければいけない重要性も知った。

そして、シュッツの《マタイ受難曲》の中にみられる音楽修辞学や象徴表現は大変たくさん手法があることを知り、音楽フィグール理論は、著述家同士の間で、用語や定義にきわめてたくさんの対立が見られ、さまざまな解説、解釈があることを、《マタイ受難曲》を考察したことにより感じ取ることができた。

シュッツ自身の信仰を表現している。その言葉や音楽に私は様々なことを思わされた。シュッツの偉大さというより、シュッツが神に仕えている姿に感動した。シュッツが強く自分の罪を楽譜に込めて、悔い改めているようにも思えた。シュッツのクリスチャンとしての歩みや、福音を音楽でつたえている作曲家だと心から思えた。

主任指導教員 長尾 義人教授  
指導教員 長尾 義人教授